

〈論文〉

森三千代の仏印小説における二つの交遊

張 雅

はじめに

森三千代と南洋の関係の始まりは、1928年9月に夫金子光晴とヨーロッパへ渡った際、南洋を経由地としてそこで約半年間滞在したことに遡る。渡航する前に森はニヒリストの土方定一と恋仲になったことで、金子との婚姻関係が破綻の危機に直面していた。彼女は金子の提案した洋行という打開策を受けて旅費の工面をしながら南洋で放浪生活を送っていた。二度目に南洋へ赴いたのは、1942年1月に彼女が国際文化振興会の囑託で、文化大使として三ヶ月余り仏印を訪れた時である。最初の南洋旅行では生きていくために周囲からの多くの援助を求めねばならず、あらゆる辛酸を嘗めたが、文化大使として仏印に滞在した際には、彼女は安南皇帝保大帝をはじめ、ドクー総督、芳澤大使、文部局長といった権力者たちや文学関係者らと接した。政府から厚遇を受けた権力者としての公費旅行は「戦争中にガソリンの入手が非常に困難¹」等という物質不足の中で、政府の官員や現地の要人が自動車を幹旋してくれたり、ホテルの予約の便宜を図ってくれたりする等、不便を感じないように配慮されたものであった。更に、戦争中に現地の学校を参観するためには、繁雑な手続きを行わなくてはならないにもかかわらず、彼女の植民地の教育状況を確認したいという意向を踏まえ、現地の文部局長と市長は手厚く世話をした。

この三ヶ月間の訪問を題材として、森は戦時中に短編小説「安南」（『中央公論』1942年5月号）、「日本の花」（『文芸』、1942年6月号）、と報告書『晴れ渡る仏印』（室

1 森三千代『晴れ渡る仏印』、室戸書房、1942年、268頁。

戸書房 1942 年) を、戦後になってから出版された『豹』(杜陵書院 1949 年) などを発表した。そのほかにも、『読売新聞』で「仏印の文筆家たちと」(1942 年 6 月 5 日)「“ 仏印詩集 ” には、笑む 芳沢さん、観劇の一夜」(1943 年 1 月 12 日)、「安南皇帝」(1942 年 6 月 3 日)、『朝日新聞』では「印象的に美しいハノイの並樹路」(1942 年 4 月 23 日) などの記事でも仏印での見聞を紹介している。

近年、女性作家の南洋に関する記述が近代日本の南洋表象の一環として注目されるようになってきている。森の仏印訪問に関する先行研究は土屋忍、趙怡などの研究者の著作が挙げられる。土屋は女性の海外体験が少なかった近代において、森三千代に関する先行研究は主に金子光晴との対関係をめぐって行われてきたと指摘している。土屋は仏印に関する歴史資料と照らし合わせながら、『晴れ渡る仏印』に書かれたものと書かれなかったもの(たとえば軍事行動、安南の独立運動など)に言及し、作品の性質は「一種の戦時外交報告書として読むならば、貴重なフィールド・ノートであるとも言えよう²」と強調する。趙は「森三千代—越境する女性作家」では旅人としての経験が森三千代に与えた影響を検討し、金子の「個体のないマスとして」の表象とは異なり、彼女の文学作品には人種差別の意識が取り除かれているという特殊性を指摘している³。また、「森三千代の仏印訪問と南洋文学」で森の親族から入手した日記を分析し、「現地の人々に好意を持っている森三千代と、統治者として君臨する日本の大使(日本政府)とのスタンスの差が歴然である⁴」と主張している。以上のように、森の仏印訪問に関する先行研究は主に戦時中の報告書『晴れ渡る仏印』や一次資料の日記などを中心に、彼女の戦争に対するスタンスや他者への眼差しなどをめぐって議論を展開してきたが、仏印から日本に帰国した直後に発表した小説「安南」と「日本の花」はまだ未検討のままに忘れられていたことがわかる。

「安南」は、1942 年 5 月号の『中央公論』に発表されて、1949 年に『豹』に収められている。この作品の語り手の「私」は外国からの旅客として、フランス人と結婚した文祥連の婚姻生活を傍観者的立場で見ている。主人公の祥連は安南の伝統的な家庭で育てられ、ハノイのカトリックの女学校を出た後に、パリに長く滞在した安南女性である。夫のリアランは第一次世界大戦中に、右手に戦傷を負った。戦後に仏印に

-
- 2 土屋忍「森三千代の南洋文学—翻案としての安南伝説」、『南洋文学の生成 訪れることと想うこと』、新典社、2013 年。
 - 3 趙怡「森三千代—越境する女性作家」、『旅の文化研究所研究報告』(21)、旅の文化研究所、2011 年。
 - 4 趙怡「森三千代の仏印訪問と南洋文学」、『旅の文化研究所研究報告』(27)、旅の文化研究所、2017 年。

渡り、錫鉱山の開発に携わっていた。フランスに帰国した後に、祥連と出会い、仏印で理想の暮らしを実現するために安南に戻ってきた。作品には森が実際に現地で見学したりセエ・アルベール・サロー学校の挿話も描きこまれている⁵。

「日本の花」は、1942年6月号の『文芸』に掲載されて、皇帝保大の秘書役を務めているロオランと「私」が交遊する短編小説である。ロオランはフランス人の父と日本人の母の間の子である。母は日本に戻った後に再び結婚して、父親の違う妹を産んだ。「私」は外国の婦人として初めての皇帝拝謁を控えていたため、ロオランが「私」の泊まっているホテルを訪ねて、親身に敬称の使い方からお礼の挨拶の文言まで細かに説明した。実際、森三千代は1942年2月26日の11時に安南皇帝保大帝に謁見した。『読売新聞』の記事によると、謁見の際に森は皇帝と旅の目的や、釣りの話などの会話を交わした⁶。

「安南」と「日本の花」はどちらも戦時中に発表した、仏印を舞台として、現地に住む人と交際する物語である。戦後、単行本『豹』に刊行された際に初出とほぼ異同がない状態でまとめられた。この二作品において語り手が語った内容は作者の森三千代の実体験に基づくものが多く、語り手の「私」はほぼ作者の森と重なっている。「日本の花」では、「私」が旅に出て以来三ヶ月が経ち、会見と招待に明け暮れる日々を送っていることを明確に書いている。作中人物との交際は二作品とも公式の会見の場での知り合いから私的レベルでの親密な関係へと発展しており、そこで描かれた他者像も近代日本の帝国主義の枠に収まらず、ステレオタイプに基づいたものではない。要するに、森は二作品であえて私的レベルの体験を前景化して、公的な植民地の権力とずれた他者像を作り出しているのである。一方、二作品は以上のような共通性があるながらも、相違点も当然ある。「日本の花」の登場人物のロオランは報告書『晴れ渡る仏印』でも言及された「フランス人の父と日本人の母を持って日本の風物に憧憬の心を持ってゐる皇帝の侍従で釣友達になってゐるマックス・デクラック氏⁷」をモデルとしていと確認できるが、「安南」の文祥連に相当する人物と森が交際したという記録は残っていないのである。そして、語り手が植民者のフランス人男性と被植民地女性を焦点化する時に、他者に託す思いと注ぐ眼差しも異なっている。

本稿はまず、「安南」と「日本の花」に描かれている他者像を分析し、旅行者としての「私」がどのように他者と関係性を築くのかを検討する。その後、外地へ移動する「私」が他者との交遊を描写することを通じてどのように女性を支配する家父長制

5 森三千代『晴れ渡る仏印』、室戸書房、1942年、17頁。

6 「安南皇帝」、『読売新聞』、1942年6月3日。

7 森三千代『晴れ渡る仏印』、室戸書房、1942年、43-44頁。

に異を唱えるのかを考察する。

1. 「安南」における近代の明暗の狭間に生きる安南女性

1.1 「オキシデント」(男) — 「オリエンタル」(女)

「安南⁸」には次のような安南の民謡がエピグラフとして冒頭に付されている。「ねもやらず女はランプをみつめる ながれる涙はおもふ人のため ままならぬ世をこよひも」、「互ひにおもはれるものを 遠く旅立ってかへらぬひと かはらぬちかひでいつまでも待つ女心」(6)。森は封建的家庭内で受動的な立場を強いられる中で恋人を思う孤独な女性の、また「男性不在」の家庭空間に束縛された女性の、哀愁と犠牲をこのエピグラフによって醸し出している。この短編は、「私」が祥連の家を訪れる、祥連が「私」の滞在したホテルにやってくる、「私」が祥連夫婦と三人で外出する、という順で進行している。「私」は祥連の婚姻生活の観察者として祥連の一举一動を注目しながらも、彼女の人生の生い立ちに心が揺さぶられ、痛ましさを感じているのである。

主人公の文祥連は親の決めた婚姻を拒絶し、一度決められた運命を自分で変えたが、夫リアランとの婚姻生活は「一族一門」にとって不名誉で不面目なことになるため、結婚式を挙げずに親族に内緒で暮らしている。一方、彼女とリアランの日常生活には西洋と東洋、伝統と革新をめぐる考え方の食い違いが常に生じている。リアランは「ハノイよりもっと郷土色のある土地へ行って生活がしたいらしかった」(5)し、結婚式も「安南人の古風な儀式にしたがった」(5)。それに対して、祥連は「迷信でかたまつたお国風の儀式などに」(5)無関心である。

「私」は祥連の家でリアランと出会い、彼が思っている西洋と東洋の考え方の相違について意見を聞いた。リアランは西洋が東洋の文化を「無智」、「奇習」、「神秘」的なものとして認識することを自文化が東洋より優越すると信じる自民族中心主義であると批判した。しかし、彼も「西洋＝人工」と「東洋＝自然」という二項対立の図式を固守し、東洋を「素朴」で「無欲」な存在であるとみなし、オリエンタリズム的な世界観に陥ることになる⁹。そのため、リアランはしばしば自分が求めている「自然に

8 森三千代「安南」『中央公論』、中央公論新社、1942年5月。以下テキストからの引用は、漢字の旧字体を新字体に変え、頁数を括弧の中に記す。

9 同書、6頁。以下は二人の会話の詳細である。引用：「はじめに言葉ありといふ文句がありますね。聖書の中の一句ですが、勿論、言葉といふのは、神様の言葉としても、遠い祖先の言葉としても、どちらでもいいと思ひます。この句を時々思ひだす毎に、いかにも東洋

従順な東洋の美しさ」(6)を祥連に当て嵌め、それを基準として彼女の振る舞いを規定している。以下はリアランが彼の「古き良き安南」に対する憧憬を「私」に語ったシーンである。

ハノイは安南ぢゃありません。非安南的なものがハノイから田舎まで次第に流れこんで、伝統的な美しさが見るかげもなく萎んでゆきます。ごらん下さい。祥連にしたって、安南の服装をして安南の美しい黒い髪をして、安南女らしくつつましくしてゐればるほど奥床しく見えると思ひになりませんか。それが皆、自然に従順な東洋の美しさなのだと私は思ひます。(6)

リアランにとって、近代化されたハノイは魅力に欠ける都市である。それと同様に、西洋の思想を受容した「新しい女」も「美しい女」だと思わないため、人為的に祥連を理想的な東洋の「古風」な女性として造型した。祥連はリアランの言いなりになって黒髪で化粧をせず、彼の隣で君主に仕えるようにしている。

言ひたいことを言ひ終わると、彼はふたたびぷりとした顔つきになって、刻み煙草を出して、左手で上手に紙に捲いた。祥連はすぐそばに寄って、マッチを擦ったが、とどかないうちに消えてしまった。夫の身边にこびるやうにまとひついて、絶えず気を付け、おそれるやうに黙々と、足音をしのばせて前を歩む祥連を、私は、いちらしいものに眺めた。そのため、リアラン氏も、殿様の味の忘れられないために東洋を賛美する人達の一人なのではないかと、私には思はれてきた。(6-7)

「私」の目に映ったのは、夫の要求に応じて注意深く行動する彼女の姿である。「私」は「オクシデント」(男) — 「オリエンタル」(女)の不均衡な関係と自己を犠牲にしている女性の卑屈な姿を察し、祥連への憐憫の情を表している。リアランは家父長権力に基づき、東洋を賛美するという名目で女性を自分に従順にさせているように見

的な味はひのある文句だと思ふんです。さうお思ひになりませんか。西洋風な考へかたでは、言葉の前に必ず、その言葉の生ずる理由といふものがつきまとふのです。それが西洋風の懐疑思想です。まづ絶対の言葉があつて、子孫或ひは民族がそれに従ふ。かういふ自然な生きかたを西洋ではずるぶん長いあひだ忘れてゐましたね。そして、天に則るといふ東洋人の自然な生きかたがまるで理解が出来なくなつて来てゐるのです。理解が出来ないばかりぢゃありません。無智に見えたり、奇習に見えたり、神秘的にみえたりするのです。」

える。「私」はこのような発言をしたリアランが「殿様の味の忘れられない」(6)、「フランス人の心のかたすみにも少しつつある古美術鑑賞の気持と通じるもの」(9)であると反発して、祥連が妻の役割を果たすために主体性を失わせてしまっているのではなかろうかと痛ましく思う。「私」は祥連とフランスという共通の生活の場を經由して女同士の友情を結ぶだけでも「奇跡¹⁰」のように喜んでいたが、まだ全てを包み隠さずに話し合うような関係ではない。そのため、彼女が歩んできた過去を知りたいという意欲はあるが、聞き出せずに傍観者として見るしかない。

安南に来た「私」はフランス人と安南女性との国際結婚の破局を「いくらか見てきてみた」と書いている。彼女は破局の理由を「風俗習慣のくひちがひ」や「意志がとどかない」こと、「男の態度の変化」(3)等とまとめている。これらの決裂のケースを数多く見てきたため、祥連が従順で温和な態度をとる裏では、表には滲み出さない誰にも言えぬ息苦しさを背負っているだろうと憂慮しているのである。「私」は父権制の重圧が安南の女性へ強いる桎梏と抑圧を感じ取っていることを以下のように語っている。

安南の女全体の暗さにつづいてゐるのやうに思はれてならないのだった。リアラン氏の言った東洋の自然の生活の根強さを私は信じないわけではなかった。しかし、どこへ行ってみても、さうした生活の自身の根強さをみつけ出すことが出来ないで、行くところで出会ふものは、却って、右左に気をくぼる卑屈なおどおどした気配ばかりであった。(10)

リアランが言う「東洋の自然の生活」というものは実は、被植民地女性が家庭で受ける安南社会の家父長制の抑圧の上に、更に植民地的な権力を家庭に持ち込むことに繋がっていることである。森は家父長制と植民地主義的権力関係によって二重に抑圧されている家庭の中で薄氷を踏むように振る舞う被植民地女性の鬱屈した思いに共感している。

その後、「私」はプチ・ラックあたりに出かけに行った際に、文学会で知り合って祥連を紹介してくれたUと偶然に会った。そこで「私」はUから、祥連がパリへ渡った理由が、生まれた後にすぐ決められた許嫁者との結婚を拒否するためであったことを聞いた。また、Uは自分が「許嫁者を嫌はなかった一人」(14)であると苦笑いし

10 同書、2頁。引用：「わづかな面識しかない人間同志、おぼつかない言葉の手引きながら、女に共通な心のいたみにだけは触れあふことが出来るのが、私には奇跡のやうに思へてならなかった。」

ながら、二人の妻が存在していることを「私」に打ち明けた。彼の「苦しげな鬚がかすめる」(14) 表情には、封建的な社会の家父長制における絶対の権威を持つ男性の立場にいる自分がこの制度を墨守してしまうという慙愧の念が表れている。

1.2 化粧する女

ある日、祥連が突然「私」のホテルを訪ねて来た。彼女は日常の恰好とは違い、別人のように変身していた。

いつも素顔な彼女が、舞台へでも出るときのやうに化粧をしすましてゐた。細く引眉をして、眼のふちのうす青いかけまでつくってゐた。指先には、紫茉莉のはなびらを一ひらづつおしつけたやうなマニキュアをしてゐた。

…

うちすてておいた紅やおしろいで華やいだ夢をとりもどしたその昂奮をふたたびかきたてて喋りはじめた祥連は、自分の気まぐれをはっきり意識してくるにしたがひ、中心がぐらぐらして、ここにあることもだんだん不安になってくるらしかった。私には、彼女の感情の変化が手にとるやうにわかった。一言でどんなにでもいたいところに触られる冷静さで眺めてゐることが出来、そのために却って私は、やさしくふるまった。彼女の心をいためずに、彼女の気まぐれを一緒になつてたのしんでやりたい気持だった。(14-15)

今回の化粧は祥連が家を片付ける時に偶然古い化粧品を見つけたことをきっかけにして彼女が過去の自分を蘇らせたのであり、リアランが不在の時にだけ実現できるものである。化粧は「私」に見せたい、自分を見られたいという欲望を表現する手法として、祥連と「私」の関係性を近づける通路になった。長谷川啓は化粧が「父権制における見られる存在として、男性のまなざしを意識した自己アピールのため」という行為であると同時に、「あるいは見られる存在から抜け出た、自分という個性の表現、自己表現のため」、「また創造する、うみだすの意があり、和歌や詩文を作成する芸術的創造を意味する言葉でもある¹¹⁾」と指摘している。ここでは祥連の化粧は、彼女の日常の苦悶を非日常の快樂に転換し、幻想の夢世界で過去の自我を呼びおこし、より

11 岩淵広子・北田幸恵・長谷川啓『フェミニズム批評への招待 近代女性文学を読む』、学芸書林、1995年、71頁。

理想的で美しい自己を作り出そうとする自己解放という変換行為であると見られる。祥連は自然の美を求める夫に従順であることにひそかに反逆し、不安を感じながらも化粧を楽しむ自分を生成した。

しかし「私」には、「部屋の灯火のうつってゐる鏡の前に彼女を連れて行って、彼女の顔をうつさせてみた。蒼みをおびた鏡にうつる彼女の顔は、假面のやうに冷たくうつろに、伝説の中の女性のやうに線がかつて見えた」(15)のである。家にいる祥連は「オリエンタルな女性」を演出せざるをえないが、自己解放であったはずの化粧という行為は、彼女の顔により一層「伝説の中」の要素を明確に浮き出させた。化粧は仮面をつけるような行為であるが、祥連の内面は依然として家父長制の束縛に囚われている。彼女はフランスの近代的な教育を受けたが、家庭では夫が望むような女性を演じなければならない。森は新時代の価値観と前時代の封建思想が相交わる社会の中に生きる女性が抱いている葛藤を化粧という行為を通じて可視化させた。

祥連は「私」の部屋に短時間しか滞在していなかったが、リアランが早く家に帰ってくると、自分が家を不在にすることを好まないと憂慮する。「私」は突然、ホテルに訪ねてきた落ち着いた祥連の様子を感じ、彼女の誰にも言えない暗澹とした心情に耳を貸し、寄り添っていきたくと突然思った。

さきの日彼女を訪ねた時、彼女の生活のうへにただよふ淋しさに触れ、今日またUから彼女の過去の一片を聞いたので、もっと深く触れて切れ切れなものをつなぎあはせ、一貫した理解を持ちたいといふねがひがあった。化粧をした自分の姿を、彼女は、友達もあらうのに、旅人の私のところへわざわざ見せにきたことが、私に、にはかな親しみの心を増させた。またたとへさきやかなことにしろ、私達が互ひに心を温めあふといふことが、おなじ東亜民族の間の大きな理解への一つの橋渡しになるのだといふ自信が、私の心の底に深く、はっきりとかくされてゐたからでもあった。(16)

彼女が自分の化粧姿を「私」に見せる行為は「私」に心の扉を開こうとするようなものである。祥連が彼女の抱え込んでいる愁悶を打ち明けるまでは、「私」は「いぢらしいこの安南女を手ばなしたなくなった」(15)、「彼女とここで別れるのが惜しかった」(16)というように、祥連と関係性を深めていきたい自分の内面を照らし出す。「私」は彼女をホテルから送り、カフェのテラスに腰をかけた後に、また安南料理を食べに行こうと誘った。安南料理のレストランへの行く途中、祥連は「私」にリアランの不幸な人生を語った。第一次世界大戦の後、仏印の鉾山で親しくなった安南女性との間

に子供ができたが、一度フランスに帰る前に母子ともにマラリヤで死亡したのであった。彼が一生涯この土地で暮らすことにしたのは子供のことが忘れられないからである。「私」はリアランの人生が背負っている様々な苦難を察知し、祥連に子供が欲しいか聞いた。それに祥連は以下のように答えた。

子供を持つことより仕合せがほかにあるでせうか。それに安南の子供は、どんなに大きくなっても、親達のもんです。古い家ではさういふやうに躑けます。安南の親達のやうな大きな安心は、ようろっぱの親達では考へることも出来ない、モン・マリはいつも、口癖に私に言って聞かせます。

…

どの家も、洪塗りの大戸を下ろしてゐた。根の蝕んだ枝が支へあってゐるやうに、みじめな、しかし、なかなか破壊されにくい生活がどこまでもつづいて、粉雨のなかで異様なしめっぽい臭気を放ってゐる。(18)

この話を聞いた「私」は、安南の家庭における家父長制的構造は堅固で、安南社会の隅々まで浸透しており、容易に破壊されるものではないと思った。また、この構造に組み込まれている人々の「粉雨」と「臭気」に覆われているなかで生きる息苦しさも感じ取っている。

食事後、祥連は家庭の空間に戻る前に化粧をおとした。彼女は家父長制の桎梏から逃れて国際結婚を選び、当時の安南社会から見ると比較的に「新しい女」に見えるが、リアランが持つ「オリエンタルな女性」像に順応して、それに合わせた振る舞いで彼の機嫌を取る。祥連はまだ伝統的な家庭観を保持しており、男性による女性に対する抑圧から解放されて自由な生活を送るという願望を持っていなかった。

1.3 理想に幻滅 現実に帰還

一ヶ月後、「私」はリアランの転任に伴い、ユエへ引っ越した祥連の家を訪れた。祥連が「私」の「心のなかの重要な位置を占めてゐた」(20) ことがわかった。ただ、時間と空間の変容によって祥連との間に隔たりが生じてしまっているのではと心配していたが、夫婦二人は温かく「私」を接待し、ベルベデールの落日を見に行こうと誘った。ガソリンが少ない状況の中でリアランは自動車の手配に苦労し、一行は出発が遅れた。祥連は「沈んでゆく太陽におひつかうとして出来るだけの速力を出した」リアランのそばで彼を「大丈夫、大丈夫」と慰めて落ち着かせた。その場に居合わせた「私」

は「殿様」とは異なる「祥連を心の支へにして生きてゐる別のリアラン氏の姿がそっとのぞいた」(22)のであった。

この二人から、この時間だけ私がおきわすられてゐるものを感じた。リアラン氏が真実に心をひかれてゐるものは、彼の言ふやうな自然に則る生活や、その生活の魅力よりも、もっとほかの人間の愛情の力であること、夫と妻の結びあひが、みかけよりもいかに複雑で深くて、はかり知られぬといふことを思ひ知らされてくるのであった。(22)

ユエへ転任したリアランは「都市」から「田舎」への空間の移動によって、「持前の陰気」(5)が消え、「世間にありふれた好人物のやうに」(21)になった。彼はハノイから離れた場所で暮らす夢を実現したが、三千代は今の生活が「彼の言ふ理想の生活とはまったくちがったものとしか思へなかった」(21)と見定めている。彼は「郷愁にみちた沈鬱な心」(23)を癒すために、東洋の自然に則った生活へ希望を託したが、この東洋への非現実的な想像はユエでの生活の現実との落差によって断念された。

小説の最後で祥連は、「夫の気心を知りぬいてゐるやうな放心さで、おしゃべりにもあきて、髪に挿してゐた素馨の花を手にとり、一ひらづつむしってはすててあそんでゐた」(23)。リアランの前で薄氷を踏むような態度であった祥連が少女のような放心さで花びらをむしって遊ぶ天真爛漫な姿を見せることは、二人の関係が「対等の位置¹²」に一転した美しいシーンとして見られる。森はフランス人男性と安南女性の双方の関係の変化を描写することで、見かけによらない多面的な夫婦関係を浮かび上がらせた。植民地男性と被植民地女性の婚姻には支配と従属という他者化した関係性だけでなく、植民地主義的な非対称の権力関係が機能しない一面も秘められていることを仄めかしている。その上で、新旧と東西文化が混合、共存し変わりつつある安南社会の、そこで生きていく多くの人々が直面する生活方式や価値観の選択などの問題を如実に示しているのである。

「安南」の結末で外部の人間には計り知れない祥連の多面的な婚姻生活が語られたように、外地に行った森は語りの権限を持つ自分が他者の物語に固定的な先入観と個人の感傷を持ち込むことを反省する認識も描写している。森はフランスと日本の植民地という場で交差する単一化にできない輻輳的な各国の人々の生き方を「安南」で挿

12 趙怡「森三千代の仏印訪問と南洋文学」、『旅の文化研究所研究報告』(27)、旅の文化研究所、2017年、90-91頁。

話として書いている。「私」はハノイの「リセエ・アルベール・サロン」という上流階級の学校を訪れた際、フランスの子供が一所懸命に「マレシャル・ペタン」の歌を披露するのを見て、「懸命に起き上らうとする彼等の背後の祖国の現実の苦悩と、子供達の一すぢな心との対照」(7)に心打たれて、涙を流さないように我慢した。しかし、その後、仏印に十数年在住しているある商店の日本人が、この学校の教育がフランス人としてのアイデンティティを意識的に子供たちに押し付けるようになったので元々この学校に通っていた自分の子供を日本に帰らせることにしたことを「私」は聞く。

最近のフランス人の学校の方針は、ずるぶん変ってきたやうですよ。本国の新しい国家体制に歩調を合はせてゐるんです。毎朝、三色旗の前で並列して礼拝させますし、いままであまり奨励しなかった体育や運動をさかんにやらせてゐます。フランス人の学校では安南の子供達も入学させて教育してゐますが、その子供達に、お前達はフランス人だ、フランス人だといって、フランス人の意識をたたきこまうとしてゐます。その子供達は、自然、フランス本位、フランス万能の意識がしみこんで大きくなります。でもフランス人の先生達は、お前達はフランス人だといったあとで、フランス人であると同時に安南人なんだと言ひ添へることも忘れません。(8)

その日本人の話聞いた「私」は「西洋＝人工」と「東洋＝自然」というオリエンタリズム的な東洋イメージを抱くリアランとは異なる生き方をしている安南の子供に気づいた。そして、自分の感動が子供の民族的感情によって駆動された一種の「安手の感傷にすぎなかった」(8)ことを意識した。彼女は、当時この学校における教育がフランスの国家体制に従って、ナショナリスティックな教育を行い、個人を集団化、フランス化することを目標としていたことをこの一庶民の話から掘み取っている。「フランス人であると同時に安南人なんだ」という一言を付け加える先生たちの行動は安南人をフランス文化圏の周縁に位置づける暴力的な操作であることが窺われる。森はハノイで自然に従順な東洋の美を追い求めるリアランや伝統文化による教育とヨーロッパの教育の両方を受けている安南人女性の祥連、フランス人として教育された安南の子供などの多様な人物像を小説で一同に呈している。「安南」の他者像の分析を通して、彼女が歴史をより多様化させることができる様々な人の声に耳を澄ませることを試みようとしていることが感じ取れる。

2. 「日本の花」

2.1 「母親と子供」の関係に転化する交遊

「安南」において森は、「私」と祥連の間で化粧の快樂やフランス文化への憧れの心情を分かち合うことを通して、信頼関係を築いたことを描き出した。それに対して、「日本の花¹³」では「私」とロオランの交遊が皇帝拝謁の行事と花札をするという二つのシーンに集中して語られている。逆に、二人がフランスと日本の安南に対する占領について意見を交わすなどのことは触れられていない。物語言説の順序は主に皇帝拝謁の前後の出来事に沿って展開されている。

「私」は日本代表の婦人としての初めての皇帝拝謁を翌日に控えていたため、その日の夜に皇帝陛下の秘書役を務めているロオランがホテルに来た。彼がホテルを訪ねてくるのは「私」が「母と妹とおなじ国籍の日本の女」であるために「郷愁の情にかられてのこと」(65)だと「私」は推測した。ロオランの父親の違う妹からの手紙が三ヶ月も途絶えたままなので心配しているという言葉に、「私」は自分の子供を思う気持ちと共通したのを感じた¹⁴。

皇帝との拝謁が終わった夜に、ロオランは「私」に家族の写真を見せたいために家に「私」を招いた。そこで「私」はロオランの家で彼と食事することになった。食事の前にロオランは花札をしようと提言した。花札に耽って時を過ごし、帰宅する時間になると、「私」は埋めようのない寂寥感を覚えた。

もう一度、ロオランが、心のうちに包みきれずよろこぶありさまが見たかった。ふとその時、知らず知らずのあひだに私が、若いロオランの上に、故国にのこして来た私の子供を眺め、子供と遊んでゐる気分をたのしんでゐたことに気が付いた。私の子供も、いつも私と遊んでもらひたがった。私が遊びごとで空しく時を消すのをいやがりはしないかと遠慮して、はっきり口へは出さないで、こちらが向ふの心を察して相手になってやるといふととびついてきた。(74-75)

ロオランとのコミュニケーションで築いた信頼関係によってロオランの身に子供の

13 森三千代「日本の花」、『文芸』、改造社、1942年6月号。以下テキストからの引用は、漢字の旧字体を新字体に変え、頁数を括弧の中に記す。

14 同書、64頁。以下の引用を参照されたい。「手紙はこの使ひといふ。その手紙が、三月も来なかった。旅に出てから、けふほどひとりぼっちになったことはなかった。けふほど淋しいと思った日はなかった。しみじみとからだのなかを流れるその淋しさだ。」

面影を見出し、子供と遊んだ楽しい時間を蘇らせた。ここでの「母親と子供」のような関係性は相手の立場を汲んで考えたために生じたものである。「安南」でホテルを訪ねてきた祥連を引き留めたのと似通って、「日本の花」においても、「私」は他者の細かな感情の変化を察し、相手の欲求に応じて、平行のままのはずの二人の人生の物語が一時的に交差する時間を生み出す。そこにともに参与することによって戦乱の中で家庭の日常の時間を生きていくのである。もう一度花札をしていた時、「私」は隣で見物していた同居のボッシュに対し、「子供の父がそばへ見にくるのを心の中で邪魔にしてゐる時のやうに」(75) 焦燥感を覚えた。それはまるで、家父長を忌避して「子供」との時間を独占しようとしているかのようなようだった。ロオランが「私」に写真を見せた時、それを彼が今まで同居のボッシュに一度も見せたことがなかったことに「私」は気づいた。「私」とロオランは親族に対する共通した思いを語り合うことを通して、心の距離を縮めていくのである。

森はこの小説で、公的な立場にいる女性が成し遂げたことよりも、他者に「日本の女」、作家、文化大使として認識されていた「私」の、「母親」としてのアイデンティティにスポットライトを当てていた。ロオランは「日本の女」として公式の場にいる「私」を鼓舞したり、「私」と家族のことを共有したりした。他方、「私」はロオランとの交遊から子供と遊ぶような疑似体験ができたのである。森は外地へ移動する女性の「母親」としてのアイデンティティを隠匿せず、かえってそれを見落とすことのできないこととして描いている。

2.2 漂泊者の魂

「日本の花」の「私」は、意気消沈した時にいつも息子の手紙を取り出して読むのである。小説で「私」は子供からの手紙を以下のように提示している。

田舎へ行かれる途中からの貴方の手紙が着いた時、やはり僕達のことをそんなに思ってくれたのかとうれしかった。思ひ切った活動が出来ないのではないかといふことです。日本のため、大東亜共栄圏のため、僕達のことを忘れてみて下さい。仏印への最初の女の文化のお使ひの役目を、立派にやりとげて下さい。出発の際、貴女が僕に約束したお土産などはどうでもよろしい。並樹のかげの深さうなハノイの街で、コティの香水を買ってゐる貴女の姿よりも、真黒になって働いてゐる貴女を想像したいと思ひます。(71-72)

子供が持つ理想の母親像は、消費などの欲望を抑えて国家のために奮闘するものである。しかし、現地で賓客として盛大な歓迎を受けた「私」が感じたのは限りない空虚と桎梏であった。ロオランの家を訪ねる前に、落ち着かなかった「私」は大市場の方へ歩いて行った。

異臭な臭気の漂ふ群集のなかを歩きながら、私は、何故かゆったりと落ち着いた気持ちになることが出来た。常に賓客でしかない私は、どこへ行っても客間の接待をうけてゐた。それだけになほ、自分にかへった時は、むなしかった。それがいま、気の張る礼儀もなに一ついらない、どこの国でも変りのない、庶民のなかにまぎれこんだ気易さであらう。

…

私は、また別のものを心でおっかけはじめてゐた。今朝から私をしくしくさせてゐた漂泊者の魂が帰って来たのだ。あと二日の滞在でユエを旅たたねばならないことが心に来たからだ。ユエで私の出会った素姓よく、ものわりのいい人達は、それぞれ忘れがたい友誼の追憶で、すでに私を蝕みはじめてゐるやうだった。ここの静かな風物も忘れ難かった。私の眼にうつるはかない映像をしっかりと刻みつけて持ちかへりたいと思ふ熱情で、いちばん気に入った場所をもう一度見てまはりたいと思った。(70-71)

「私」は市場でエリートと異なる庶民の生活から発散された自由な空気を吸い込むことによって、初回の南洋旅行の時に身に刻み込んだ漂泊者の魂が再度呼び覚まされた。十年ほど間隔の空いた二つの南洋旅行は全く異質なものであるが、完全に連続性がないものとも言えない。「私」は今回の旅を通じて文学上の同志と交流することと、文壇で名声を獲得することを希望するが、繁雑な礼節と常套句に取り囲まれているため、一人でホテルにいる時は常に空虚感に襲われていた。神経が張り詰める公務を執行することは、作家として民衆の生活の場に目を凝らす場所から離れて、作品を執筆する養分とインスピレーションの源泉を枯渇させることを意味するため、「私」の初心と乖離してしまい無力感を覚えている。ただ、仏印における支配と圧制の上下関係に左右されることなく人間の善意や熱情などの観念に基づく親交を深める交流をすることは、否応なしに「私」を変えて人生における有意義な記念となったとも述べている。

小説の最後は、「私」は、「どうしてもロオランに勝をゆづってやるが出来なかった。なにかものがなしい、けだるい平和の中で、聞いたこともない小鳥の囀りを聞きながら、私達は時間を忘れて札を捨てたり、拾ったりしてゐた」(75)と締め括られ

ている。「私」は息子が思うような理想的な母にはなれない、そしてなりたくないと定めたため、息子を重ね合わせているロオランに勝たせたくないのである。森は兵士を出産し子供を国家に捧げるという国家が描く崇高な母親像に背を向け、崩れ去りそうな親子の日常を守ろうとする母親像を描くことを通して厭戦への気分を醸し出し、戦争に対する抵抗の姿勢を示した。

文化大使の仕事の内実は森の当初の期待とはずれたことがあっただろう。事実、森は長谷川時雨が編集者として立ち上げた「旅行に出られないわけ」(『輝ク』 1937年9月17日)で、彼女はプロパガンダの場になっているメディアの報道と自ら距離を置いたことを次のように書いている。

朝からちっとも号外の出ない日は世の中がしいんとしてみても、知らない所で何事が起りつつあるかと不安で、無気味なものにおそはれ出す。新聞や号外の報道をみてもいつの頃から、それ等に対して不信の眼が培はれはじめてみて、すぐその裏のなにかを読みとらうとする。これは不安な悪い状態である¹⁵。

長い間に中国や南洋、西洋に滞在した森は日本を離れた環境で暮らしてきたため、自国を相対化する国際的な視線を培っていた。彼女は当時の日本社会において一部民衆が戦争に対して危惧する態度¹⁶とマスコミによるナショナリズムの高揚という二極化する現象に不安を抱いていた。従って、森は戦争を美化するイデオロギーに基づいて産出される偏った新聞の記述とは異なるもう一方の事実を求めている。また、1942年出版の『晴れ渡る仏印』の冒頭に綴られた一文で森は、植民地視察において全く異なる環境に運ばれた自分は無力な虫のように極めて小さな存在であると、自分の置かれた立場についての偽らざる思いを漏らした¹⁷。彼女は個人の力は巨大な権力機構の前では取るに足りないものであり、常に「何者か」に日常的に監視されている

15 森三千代「旅行に出られないわけ」、『輝ク』、輝く会、1937年9月17日(『復刻版 輝ク』、不二出版、1988年、218頁)。

16 同書、218頁。以下：「戦争は、どうなるんでせうね」というふことばが、人に会ふと挨拶のやうに出る。けろっとして口にも出さないやうな人は、もっと関心をもってゐることが顔にありありと書いてあるやうな気がする。」

17 森三千代『晴れ渡る仏印』、室戸書房、1942年、2頁。引用：「子供の時、よく、這ってゐる虫を捕へて別なところへうつし、その虫が自分のゐる場所を見定めるようとしてくるくるまはってゐるのを眺めて面白がってゐたことがあった。私はいま、それを思ひだした。突然私を違った環境に運んできた何者かが、じっとどこかで眺めてたのしんでゐるのではないかといふ気がした。」

ため、自由に言葉を話し身動きすることができないことを自覚していた。

では、彼女はなぜ文化大使の仕事を引き受けたのだろうか。森は「林芙美子さんを語る」『婦女界』（1939年4月号）の一文で、人気者である芙美子の誰よりも早く戦場に足を運ぶ姿を以下のように評している。

たくさんの男の従軍作家たちにさきがけて漢口の一番乗りをしたのは芙美子さんだった。そして現に、『戦線』や『北岸部隊』を書いて、火野葦平とともに時局ものの人気を一人でさらってゐる。

『北岸部隊』を読んだ人は、この戦線の報告書のなかに、『放浪記』の生活とおなじやうな彼女の人生への冒険を見出すであらう。砲煙弾雨のなかの芙美子さんは、輸送船の船底に下りて行って軍馬に秣をやったり、野戦病院で傷病兵の繃帯を巻きかへる手伝ひをしたり、さうかと思ふと、アマの子供を背負って支那人町へ鴨の肉や蕪を買ひに行つて御馳走をつくつたり、芙美子さんはそこでも彼女の生活があるがまゝにうけいれ、天真爛漫に生活してゐる¹⁸。

当時の文壇にとって林芙美子は、硝煙と血で染まった戦場に自ら身を投じ、過酷で危険に満ちた環境に耐えて負傷兵の治療を補助しながら、そこに生きる庶民の生活に近づこうとしていた独特な存在であったと言えるだろう。森は戦場という日常を破壊する空間の中にあつて何気ない日常を大切にす林芙美子に対して尊敬の念を抱いていることが読み取れる。一方、ヨーロッパから帰国して、作家としての上昇志向を強く抱いていた彼女はまだ知名度が低い自分に対して焦燥感を覚えていた。「火野葦平とともに時局ものの人気を一人でさらってゐる」という林芙美子に対する評価からは、民衆の関心が高い戦場に駆けつけて時局に便乗することによって作家活動で生計を立てている火野葦平や林芙美子のような人物に森は触発されていたと捉えられる。そのため、文化大使として仏印へ訪問する機会彼女の「先頭に立ちたいという功名心と、侵略戦争に加担しないという」心理を「満足させるものだった¹⁹」と趙怡（2017）は指摘している。土屋忍（2013）も彼女の戦時報告書から「確固たる植民地主義はみられないが、かといって反植民地主義思想を見出すこともできない²⁰」という見解を

18 森三千代「林芙美子さんを語る」、『婦女界』、婦女界出版社、1939年4月号、76-77頁。

19 趙怡「森三千代の仏印訪問と南洋文学」、『旅の文化研究所研究報告』（27）、旅の文化研究所、2017年。

20 土屋忍「森三千代の南洋文学—翻案としての安南伝説」、『南洋文学の生成 訪れることと想うこと』、新典社、2013年。

示している。

この旅行は一見すると華やかで名高いものであったようだが、繁雑な旅程に追われる中に、森は当局に迎合することによって、根なし草のような漂泊者の魂を見失うことで生じた空虚感を味わうようになった。彼女は時代の人気者であるよりも、共同体に帰属できない漂泊者であるという作家としての立ち位置を再確認できた。言論統制が強化されていたなかで、旅行中の空虚を克服するために彼女なりに見つけ出した創作の隙間は、人間同士の交流を通じて相互理解を深めることであった。それによって、自分が戦時中に成したことは東アジアの友好に繋がっていくのだと自分を納得させることもできたのである。

結びにかえて

本稿は森の文化大使として戦争に加担した責任を認めながらも、小説で描写された旅路における「私」の心境の変化から、森の創作内容を捨象したものと作家として再確認できたものを明瞭に分けた。戦時中に「大東亜共栄圏」に統合される被植民地の女性も銃後の日本女性と同様に家庭優先で夫に忠実、子供に献身的であることを求められていた。しかし森は、「安南」と「日本の花」では、家庭を「最小単位」として女性を支配する「帝国」日本の家父長制度に反発の声を小説に宿している。

森は「安南」で、フランス人と結婚した幸せそうな女性の婚姻生活の裏面の閉塞感を描くことによって、家父長制の桎梏から女性を解き放とうとする願望を示している。彼女は女性作家ならではの視点から、祥連への繊細な気遣いと保護欲を見せ、戦時下に越境した「私」と家出した安南女性が、言語化しえないものを心で通わせ合う、女性同士の友情を語った。そして、ハノイの静けさの底に流れている近代主義と伝統主義、宗主国フランス/日本と被植民地安南の衝突と対立によって起こった波乱を物語の主人公の生き様を通して浮かびあがらせる。森はこの作品で安南の女性が家父長制の束縛のため個を犠牲にするのを描くことを通じて、女性が男性の求める女性像に囚われることなく、自分の意志のままに個人の幸福を追求する希望を伝えている。

「日本の花」では森は、「私」とロオランが非公式の場で親族への思いを分かち合い、戦争や国籍というフィルターを通さずお互いの郷愁を分有することによって親睦を深めたことを描いている。「日本の花」の「私」が実子から受け取る手紙で求められるのが、家父長制を代行するように「外地」において活躍し、「子」を放棄し国家に「献納」するように変容させられた「母」であるのに対し、ロオランとの交流で蘇るのは家父長制的なるものに「子」を奪われまいとする「母」である。

戦時中には文学者は時局に迎合しなければ発表できないという閉塞状況に置かれていた。戦意高揚の国策文学が一色に染まりつつある中で、森はその道を避けて迂回した。彼女は敵愾心を煽らない外地にいる女性の体験と生き様を創作の主題として取り上げ、大名旅行と揶揄される中、異なる小径を歩んだ。移動は境界から歩き出して、他者との差異と同一性をより意識する過程である。被植民地に移動する森は日本の占領政策を前線で目視する当事者であるとともに、類型化された報道とは異なる等身大の民衆の生活を実感する観察者でもある。「家父長」に転じたように見え、「文化大使」として外地へ移動した森は、結局繁雑な公務のなかで空虚感に苛まれていた。今回の旅を通して彼女にとって越境することの意義は、国家の縮図である家庭において女性の境遇を見つめ直し、理想的な「母」と背離する自分なりの「母」としてのアイデンティティを強調することによって、国家が主導した暴力に協力の手を差し伸べた自分を反省し、直接的ではない形で異を唱えることにあったのではないかと考えられる。

付記 本稿は第12回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2018年12月8日、香港理工大学）における口頭発表をもとにしている。